

ガンバリの力を育てる

遊びと素材

(その一 ビーズ)

清水 エミコ



〈目的〉

昨年は、感情教育に役立つ活動として、思いつくままに、失敗感と成功感のたやすく味わえるやりなおしの可能な教材をえらんで、物（子どもたち自身でくりかえしの可能なもの）との関係において感情表現をみる回を重ね、よろこび・かなしみの感情を積極的に変化させていく訓練をしながら、子どもたちのがんばる力を確かめてきた。

そして、その効果に驚くと同時に、子どもたちの持っているエネルギーの偉大さに驚かされたのである。

そこで今年は、くりかえしと、がんばりの力を計画的に確かめてみることにした。

○与えられた教材で楽しく遊ぼうとする態度を身につけさせたい。

○失敗したらやり直せばきっと成功する、という積極性を養いたい。

このような目的を主にして確かめてみることにした。昨年の活動の中で、子どもたちの材料に対する基本的な行動に気がついたので、（ころがす、まわす、はじく、ひく、おす、ふく、たく、ぶつける）これらも確かめてみたいと思い、子どもたちのまわりにある素材（教材）をみまわし、大ざっぱな年間の見通しを立てて実行してみることにした。

〈教材と計画のめやすと与えかた〉

○ひとりの落こ者も出さずに、子どもたちが興味をもって活動できるもの。

○失敗の程度があらかじめ予測でき、その失敗が何らかの方法です

くい上げられると思われるもの。

○その結果が劣等感にならず、がんばりの態度が身につき活動の発展が期待できる教材を考えた。

材料表

四、五月 ビー玉

六月 糸まき

七月 空かん

九月 紙のボール シャボン玉

十月 ジシヤク

十一月 空箱

十二月 袋

一、二、三月 四角、丸、三角の紙

教材を与える教師の態度は、それぞれの教材を環境として保育室の一定の場所に備えておくだけにし、子どもたちの活動の可能性をたしかめることにした。

へ 四、五月 ビー玉

ビー玉五〇〇個（一年保育四〇名の学級のため、一人が十個平均持てるように考えた）を、入園して一週間目に保育室の戸棚の上に空箱に入れて出しておく。

始めの二日間は、入れかわり立ちかわり箱の中に手を入れて、いじってみるだけだった。三日目から活動らしいのがみられた。

ころがす

○ころがっていくのを見て楽しむ

○床いっぱいにはらまく

「おんなじところからころがしてるのに、みんなちがうほうにころがっていく、おかしいね、たまにしかおんなじところにいかないよ」

ころがしたビー玉が偶然のぶつかり合いでいろいろな方向が変わったり、はじけたりするのを楽しみ、喜ぶ。

この遊びはビー玉を与えて一週間位、男児女児共入り乱れ、かわるがわる繰り返して遊んでいた。ビー玉をわしづかみにして、いっぺんにころがす（はらまく）。その時のガラスのふれ合う音やちらばり方などで、非常な解放感をあげわっていた子が目立った。内向的で友だちと遊びたくても遊べないというような子たちが、目の色を変えて何回も何回も繰り返していた。そしてぶつかった同志の思いがけない交わりが見られるようになり、その交わりが瞬間的なものであっても、しばらくの間そのもの同志で行動している。

○床に白ぼくで道をかいて、その上をころがそうとする

「ころがしな」とただひとこと相手に言うだけの子や、相手のかいた道の上にそっとビー玉をころがしておいてみて、相手の顔を見ている子、などで交わりなどとは言えないほどの軽いものだった。が、この遊びでもいろいろのことを発見した。

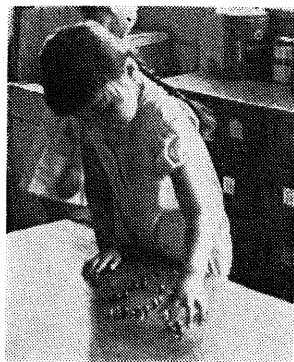
△まがった道をかいても、どんなにやり方を変えてみても、うまく道の上をころがらない。

△まっすぐな道にすると、道の上をころがるようになる。しかし、力の入れ方やちょっとした加減でカーブしてしまうことなどを学び、自分の指先に全神経を集めいろいろかげんしたり、繰り返し、やり直して試している。この時のひとりひとりの真剣な顔は何とも言えない力強さをみせている。

そして思わず、固く閉ざした口から「ワーあんたの　ここまわたって来た」とか、「ワーまたまがっちゃった」といったようなことばがもれてきた。

○机の上をまっすぐころがす

床の上ではものたりなくなった者たちが、机の上でころがしはじめた。そして、その時のスリル感が「むこうまで、だれがわたるかやろうよ」の声を生み、それにつられてみんなかわいい指先に全神経を集中させてビー玉



を押した。のせたところにホトンと落ちるものなどいろいろな音が、みんなホトンホトンと床に落ちてころがっていった。ころがっていくビー玉を腰をま

げてひろいながら「ようし、こんどこそ」とか「おまえ、ビー玉おかないでよ」とか、今度こそはとりきみながら、くり返している。(写真①)

そして、努力とくやしきが強くなりすぎた時、机のへりより中に入った所をころがす子がでてきた。そうすると「よっちゃんずるいやー、こんなとこならだれだっておちないよ」と相手を批判したりされたりすることもおこってきた。相手にずるさを指摘された子は、何とも言えないばつの悪さでれてしまっていた。私は良い葉だと思って、じっとみていた。その時、側でひとりっ子の、のり子がこれを見ていて、私のそばにそっとやってきて、

「先生　うちのお父ちゃん、のりこがずるしても、うまいぞ勝った勝ったっていうわよ」と言うのである。子どもたちはこうして集団の仲間どうしのルールやきびしさを、身体で知っていくのだなど、私は思った。そして、親が子どもを楽しませてやろう、よろこばせてやろうと思う甘いあやし方は、現代に生きる子どもたちには通用しないで、すっかり手の内を見破られてしまっているのを知られただのである。こんな遊びをくり返しているうちに、内気で人には何も発表することができず、他人に何か言われるとまっ赤になって恥ずかしがる、のぼるがまっ赤な顔で「みんな机のまわりに来てみな」と呼んだのである。そっと近づいてみると――

○机から落ちないようにころがす

のぼるが、「机のまわりにみんなが立ち、机の上をそれぞれのビー

玉をころがし合い、手や身体で机から落ちないようにしよう」と提案した。「よいいはじめ」と誰かの合図でビー玉が机の上に入り乱れて、ころがりぶつかり合い、そしてちよつとしたすきに机の下に落ちる。ビー玉がひとつ落ちるたびに、仲間たちはキャーキャーとかん声をあげたり、とびはねたりしてくやしがり、たび重なって落す子どもたちに「竹内君、きをつけなよ、ほらほら」「かずお君のここにもいくよ、ほーら」と応援し合ったり、人のことに気をとられて自分の前でボトンと落ちたのを見て思わず「残念、ゆだん大敵」となまいきなことばまでとび出すのである。

この遊びで、三人以上の友だちと長時間あそぶということを大半の子どもたちが体験したようである。また、男も女も一しょになつて遊び合うきっかけにもなっていた。何にもまして得がたい経験は何人かで一しょに遊ぶ時は、みんなと調子を合わせて（協力して）あそばなくてはならないことを知ったことだと思ふ。

「てっちゃんとのぼるちゃんのところはいつもおちないじゃない」「てっちゃんがきたよって言うから、ぼくがビー玉の方をみて向うにやるんだよ」というように、子どもたちは友だちの行動にも強い関心を示すようになった。そしてこの遊びでビー玉どうしのぶつかり合いに興味をもった者たちが多く、相手のビー玉をねらつてぶつけることが行なわれ始めた。

ぶつける

○ころがして相手にぶつける

保育室の机も椅子もみんなかたづけ、室をひろげてビー玉をころがしてぶつけ合っている。登園してくる子、誰かれ構わずに入口で孝教がビー玉を渡して「はい、これどうぞ」と言つて渡されるとき、みんな魔法にかけられたように室の中に入ってビー玉をころがすのである。その自然さに、私は驚きと同時におかしさを感じてきた。入口から入ろうとする私にも孝教は「はいどうぞ」とビー玉を渡してくれた。室の中はハチン・ハチンワッハッハ・ワイイなどビー玉のぶつかり合う音と歓声が入り乱れていた。私も腰をおろして、ビー玉めがけてころがした。バチン、私も思わず「あたつた」と言ってしまったほど雰囲気はより上がつていた。女児たちも全力を入れてねらっているが男の子にはかなわないようであった。

あまり力を入れすぎてころがし相手のビー玉に当らず、壁にぶつかつてはね返つて来たのを口惜しがったり、相手が力まかせにころがしたのがぶつかつてビー玉が二つに割れてしまつたり、しゃがんでいるお尻の下をスピードで通り抜けるビー玉を見て「トンネル通過」と大声をあげたり、「君とぼくといっきうち」といったりしておもしろいように遊びが変化していった。子どもたちは考えようと意識しないで、考えている姿を見て、雰囲気（環境）の力の偉大さに驚かされると共に、環境設定が如何に大切かを、目のあたりに見せられた思いであつた。

○まとめて

ママゴトコーナーで遊んでいたはるみが、ころがって散らばっているビー玉を集めていた。そして、茶わんを床に置いた時ビー玉がころがってきて茶わんにぶつかり、茶わんを倒してその中に入った。「わー入っちゃった」と嬉しそうにビー玉をころがした雄一が近よって来て、はるみに笑いかけた。はるみも「入ったね、もう一回やってみな」と言って茶わんを立てた。しかし、今度は何度やっても入らない。「横にしてやれば」と見ていた伸子に言われ、はるみは茶わんを横にして押えた。雄一のころがすビー玉の大半は茶わんにころげ込んだ。これを見ていた清志は積木でかこい「を」をつくって、その中にころがし込んでいた。また和広は三角の積木をまどにして当てていた。これを見て清志が「ぼくも寄せて」と和広のまどあてに加わっていった。

このように、ビー玉のころがった先の偶然が子どもたちをいろいろの遊びにきそっているのである。こんな様子を毎日みていると、ただのガラスのビー玉に何かもの凄いが秘められているような気さえてきたのである。

○射的ごっこ

このまど当てはしばらく続けられ、画用紙で人形を作って倒しっこしたり、その人形に点数がかかれ、その点数によってビー玉の数が決められていて、賞品代りにその数だけビー玉が貰え、誰が一番たくさんビー玉がたまるか競争したり、ルールに複雑さを加えてきたのである。

○ままごとのごちそう

この頃になると女兒はあまり、ころがしたりぶつけたりしなくなつた。そしてままごとの中にビー玉を持ち込み、ごはんにしたり、「たまご割ってくださいな」と卵になったり、「肉ボールね」とおかずになったりしていた。「ごはんは箸で食べるんだもの、箸ではさむのよ」と久美子が額にしわを寄せてどなっているので行ってみると、純子が茶わんの中のビー玉を箸でかきまわしている。私の近づいたのを見て久美子が、

「先生、純ちゃんビー玉はさめないんだよ」と言うので、「久美ちゃんはある」と聞くと「あたしできるよ」とママゴトの箸でビー玉をつまんでみせた。そこで、まわりにいた数名に次々にはさんでみるように言うのと、上手にはさむ子とコロツところがす子と半々だった。

○ビー玉つまみごっこ

その日の活動を変更して、ビー玉つまみをゲームに仕組んでやってみた。ママゴトの茶わんに、割箸でビー玉をはさんで入れっこし、誰が何個入れるかやってみた。あわててひとつもつまめない子、落ち着いて夢中になり10個もつまんだ子、それはそれはみんな真剣である。何回繰り返ししてもつまめない、ぶきつちよな子の淋しそうな顔がみられたので、赤・白に分れて団体ゲームをすることにした。一定の場所で、きまった数のビー玉をおちゃわんに一個ずつ親指と人差指でつまんで入れて、次の人に渡す（パトンの代りに）。

次の子は、それを持って一定の場所までかけて行き全部こぼして、またひとつずつ、つまみ入れるというゲームに仕組んでみた。今まで箸でつまめなかった子も、中でつまむため気楽に楽しんでやれた。そして、あわて者やわがまま者は、ひとつひとつきめられた指でつまむとかしきから、わしづかみにしてしまい、皆から「ずるい、ずるい」とはやしたてられ、ていさい悪そうにやり直したりした。

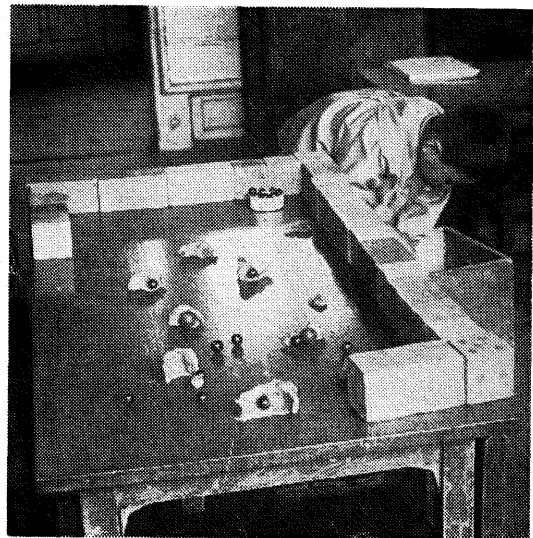
こんなことから思わぬ性格があらわれたり、今まで味わったことのない忍耐をさせられたり、子どもたちには楽しい中に種々の課題があったようだ。正直に言って、このゲームは、どの位指先の運動が可能なのかをみたかったのと、箸でつまめなかった子の劣等感を取り除かねばと思う軽い気持ちでやってみたので、これほど子どもたちの学習の場になろうとは思わなかった。この日は、ビー玉を与えてからちょうど20日たっていて、この間、一日もビー玉で遊ばなかった日はなかった。そしていつとはなしにビー玉の数が三分の二に減っていた。この頃になると与え始めのように、だれもかれもがビー玉で遊ぶというのではなく、興味ができた子がかわるがわるビー玉で遊んでいるというように変わってきていた。

は　じ　く

○バチンコ

机のへりのぐるりを箱積木で囲い、ところどころに粘土でくぼみをつくって、置き机の一隅を細くあけ、そこからビー玉をころが

②



し、粘土のくぼみころがし込む。そのくぼみには 3・5・7 と白墨で数字が書かれ、その数に入ると、見ているまわりの子が「ジャラジャラ」と言ってその数だけビー玉をあげる。この遊びでは、手どころがすのとビー玉を積木ではじき込むのと二通りに遊ばれ、父母と町で見たバチンコ屋そっくりである。三〇個たまったら「ぼく、大きいチョコとるんだ」と言っとうすい積木をチョコに見立てたりしている。(写真②)

○コリントゲーム

この遊びを見ていた康弘が、机の上に積木で迷路のような道を作り、片すみから積木でビー玉をはじき、そのころがり方で点数をきめる遊びを考えだした。

この遊びを見ると、ビー玉と他の遊具とを組み合わせて遊ぶうとする様子がみられるようになってきた。空箱の底に穴をあけその中にビー玉をたくさん入れて、両手で箱を左右に動かし、箱の穴からビー玉を落して楽しんだり、画用紙の上にビー玉をのせ、落さないように歩いたり、といったように遊びがひとりで工夫されるようになった。ビー玉と力入れ方などを、くり返しくり返しやり直しながらだんだんできるようになった。

坂をころがす

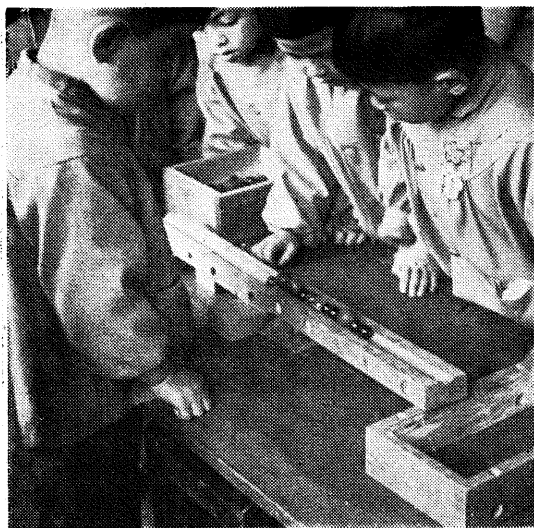
○組木と一しよに（子どもたちは真剣に実験していく）

六月に入ると組木を一しよに使用して遊ぶようになった。そしてその遊びが毎日毎日ほんの少しずつの変化と進歩をしながらなされていくのには驚いた。

まず、まん中にくぼみのある組木の上をころがす。（写真③）

そのうちに、一個ずつでなく十個位連続させてころがすようになった。粘土で先頭を押えて止めておき、ビー玉を並べながら粘土を取り除ける、と同時に一番終りのビー玉を押す。ビー玉が列を作ったころがり、机の上に次々に落ちて散らばって、床にころがっていく。何でも不思議がる竹内がこの遊びをしていて、「先生、どうして

同じ所から、おんなじに落ちるのに、いろんな方にころがるの」と真剣に不思議がって質問してきた。私にも科学的な正しい答え方はできないので、「不思議ね、どうしてかしら」とだけ言うと、一個のビー玉を拾ってきて光に透かしてみても、「先生、ビー玉の中にボツボツしてるのが入ってるから、あれが決めるんじゃない？ きつとそうだね」と言いながら、何回も何回もころがしては床に散らばして試している。これを一しよになってやっていた和弘が「竹内君、みんなこぼして、拾うのたいへんだよ」「そうだ、積木で入れものを作



ろうよ」と、ころがり落ちる所を積木でかこった。

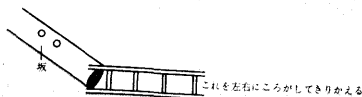
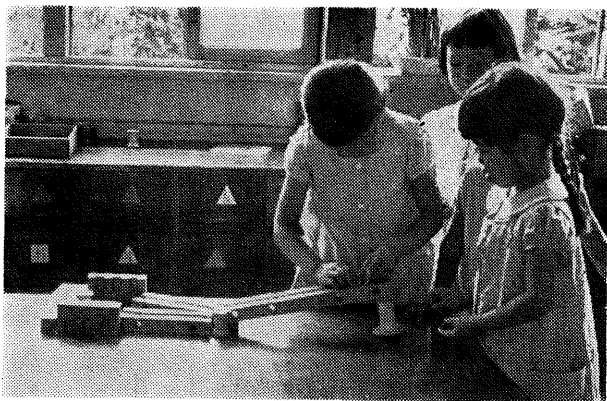
「坂にしたのね」と保育室で遊んでいた昇が登園して来た。竹内と和広に言くと、「へーおもしろい」とすぐにそれに加わり、組木をいろいろに重ねて高くしたり低くしたりして、ころがりぐあいを楽しんだ。

○部分品がくつついていく（トンネル 鉄橋）

坂の途中にトンネルがついたり鉄橋がついたりしていった。トンネルは簡単だが、鉄橋はちょっとたいへんだった。組木と組木の間にはさみ込まなくてはならないし、組木の継ぎ目が重なって、そこにビー玉がつかえて止ってしまい、何度も何度もやり直し、しまいに画用紙の鉄橋を考えだしたりして、小さい頭は四苦八苦し、四、五名集っては何とか解決していく。トンネルも画用紙で長いのを作ってみたが、坂の傾斜がゆるくトンネルの中でビー玉が止ってしまつて、皆が大笑いしながらもどうしようかと考え合っている姿は真剣そのものである。そして坂を急にして、ころがりすぎてびっくりしてトンネルの中をのぞく子や、もう少し低くしてみろ子など、入れかわり立ちかわりやつてみるようになった。庭から何かの都合で（おもちゃを取りにきたりして）入ってきた子まで、ちょこつとビー玉をころがして出ていったりしている。

もうひとつの組木（フレーヘル製）、階段のように四角い穴があるものを組み合わせて、切りかえなどが考えられた。（写真④）溝のある組木に細い棒を立てそれに四角い組木をはさんで、ころ

④



がってくるビー玉を右へ、左へと切りかえる。徹也が偶然にやり出したことなのだが、みな大よろこびでかわるがわる切り変え番になってやっていた。傾斜の加減でとんでもない方向にはじいたり、ゆるすぎて切り変え損ねたり、みんなキャーキャーかん声をあげて遊んでいた。

○ころがりの反動を楽しむ

組木をゆるいV字型にしてころがし、反動でどこまで坂を上るか、試していたり、反動で坂を上がっては、下の囲いにくろがりこませたりしていた。

組木と組木の間を開けておいて、そこを飛び越えて向う側の組木に渡るようにする。これは驚く程何度も試され修正されていた。

○傾斜が小さすぎてほとんど落ちてしまうもの。

○間隔が開きすぎて、反動で飛んできても途中で落ちてしまうもの・傾斜が急すぎ次の組木の角にぶつかって、とんでもないところにはじめてしまうもの・力いっぱい手でころがして組木からはずれてしまうもの・組木と組木の位置が、まっすぐでないために、途中でこぼれてしまうものなどで、なかなか成功しなかったが、昇と徹也は真剣にビー玉と組木に挑戦し、ついに征服した。みごとに通過するのを見て思わず、「成功」と叫び「やっと渡ったよ、たいへんだつたよ」とため息をついたほどだった。茂がそれをじっと見ていて、「まっすぐ継がないと、こぼれるね」とか「坂がちょうどよくないと、おっこっちゃうね」と言う。実際に手を出して経験しない子まで、見ているだけで学習していたのには驚いた。そしてこれを機に友だちと交われない茂が机のまわりを積木で囲い、「川に落ちたのはこっちで集めるよ」と言って遊びに加わっていったのである。

○いろいろの傾斜を確かめる
△長い道をころがす。

高くしたり低くしたりしてころがしていた正光が、とつぜん竹内

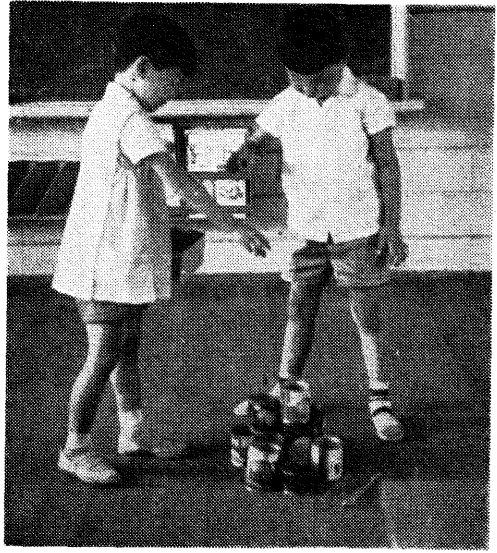
に「竹内君ちょっと来てよ、ほくうんと長くころがそうと思うの、いっしょにやらない」と、助けとも誘いともつかない呼びかけをした。試すことの好きな竹内は「うん」と、すぐいっしょに、長くつなげた組木の上をころがし始めたが、傾斜がゆるくて途中で止ってしまった。二人で「へんだなあ」と首をかしげ、真剣に何回も試していたが、しまいに、「そうだ高くするんだよ」との竹内の声に、「そうだっけ」と言いながら、一方に積木を積んで傾斜をつけ成功させたのである。

△ビー玉受けに変化がついた。

ころがってくるビー玉を受けるか、いかにいろいろ変化をつけることを、正光が考えついた。粘土で当りはずれの区切りをしたり、積木でいろいろの形をつくって玉が入り込むスリルを味ったりした。

△夢の超特急・こだま・各駅停車で競争させる。

まずえが一人で道具戸棚の上にビー玉をころがしては、落ちると急いで拾い、「どうしてこっちへって向かそうとしても、違った方に動くのかなあ」とひとり言を言いながら何回も繰り返していた。そのうち、早苗が近づいてきて、「ここのはじ、積木やれば落ちないわよ」と言ったので、まずえはさっそく積木で防波堤を作って中をころがし、「ほんとだ、ぜんぜんおっこちないね」と言ってから、身体ごと早苗の方へ向きなおって、「早苗ちゃん、ビー玉っておもしろいよ、おんなじにまるいでしょ、おんなじ大きさだね、それでおんなじにくろがしても、いっぱい走っていくのとすぐ止っちゃうのとあ



るんだよ」と、とても不思議なことを発見したように問いかけていた。早苗が何と答えるか興味をもって、聞き耳を立てると、「フーン、そんなことないでしょ」とおとなぶった答え方をしてから、「どら」と自分で試した。そして、「ほんとだねおかしいね」と言っているところに桃子が入ってきて、「早苗ちゃん何やってんの」と言うなり、溝のある組木を戸棚の上にのせて、ビー玉をころがした。積木の一方の下に組木を台にして、急な傾斜を作ったころがしたので、ビー玉は手を離れたとたん、勢いよくころがって戸棚にぶつかって、落ちた。まずは「急行だね、これ夢の超特急ね。早苗ちゃんこ

ま号ぐらい早い作りなよ。ここじゃだめだから、机の方でやろう」と机に組木を運んで作り直した。早苗も「うん」と明るく答えてから、「そんな桃ちゃんは普通の汽車にすれば」と言って机の片すみを空けていた。この時、庭から室に入ってきた正光が「それはね、各駅停車だよ、ぼく手伝ってあげるよ」と、組木と机上積木を持ってきてゆるい傾斜を作りだした。「ワー、速いよ」

感きわまったようなますえの聲が室の中に広がり、その後入れかわり立ちかわりビーボーとビー玉をころがしていた。

△康弘が「おい、みんなここにならんでいるだろう。いちにいのさんでころがして、どれが早いかやろうぜ」と言ったので、近くにいたものたちで三人組が作られ、ジャンケンで夢の超特急・こだま・各駅停車と決めて、ころがし合っていた。「やっぱり夢の超特急が早いね、その次がこだまだよ、びりが各駅停車だね」と、今さらのよう

に感心している子が多かった。

△こだまになって負けた竹内が「よし、もう一回やろうぜ、今度こそぜったい負けないぞ。夢の超特急になった正光も、負けないさ、やろうぜ」と各駅停車の京子を呼んでころがした。この時、竹内はビー玉に力を入れてころがしたので、夢の超特急を負かしてしまっ

た。「わーい、夢の超特急を負かしましたー」と、とび上って喜んでから「ねえ先生、高い方からころがすと速くころがって、低くて平らみたいな方からやるとのろろと遅くころがるんだね。もっ、もっ、と高いところからころがせば、あっという間にころがっちゃうね

おもしろい、おすべりと同じだね」「ほくためして、みるんだ、いろんな高さ作ってやってみよう」と、積木と組木でいろいろな種類の坂を作っているがしていた。そして、まわりにいる子にも、ころがすことを許していた。いつもだったら「だめ」とか「いや」とかいうことが聞かれる子なのに、この時ばかりは一度も聞かれなかった。そして、「先生一番高いのは落すのと同じだね」と、言うのである。

このように子どもたちは、自分の指先ほどのビー玉に全身でぶつかり、何十種類もの確かめや繰り返しをした。

これらのビー玉遊びは、毎日毎日、誰れとはなしに遊ばれていた。

昨年試みたシャボン玉・シシャク・コマなどにみられた集中のしかたとは違い、長期間波がなく続けられた。そして、シャボン玉・シシャク・コマのような急激な発展や発見ではなく、ほんのわずかの、ゆるやかな発見と発展であることを知った(例、傾斜の変化、ビー玉受けの変化)

○ビー玉遊びでの子どもたちのあらわれから

△思いがけない、ほんのわずかな事柄を不思議がる。(例、ビー玉のころがり方)

△偶然、思わぬ時と場所で、思わぬ交わりを持つ。(例、ぶつかったどうしの交わり)

△自分で試めし繰り返し返して、がんばらなければ、失敗を成功に変え

る事はできないことを知っていく。(例、繰り返ししているうちに、力の入れ方・離し方のこつを身につけていく)

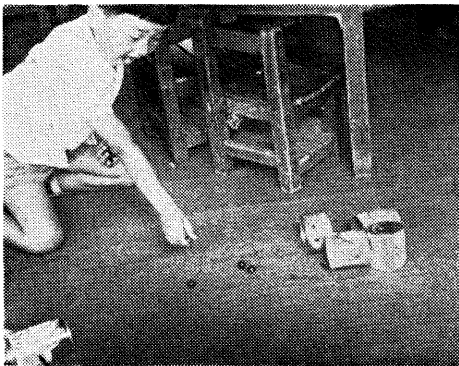
△繰り返しの中から、スリルを掴み、ルールを作って遊ぼうとする。(例、まっすぐころがす、コリントゲーム、夢の超特急、こっこ)

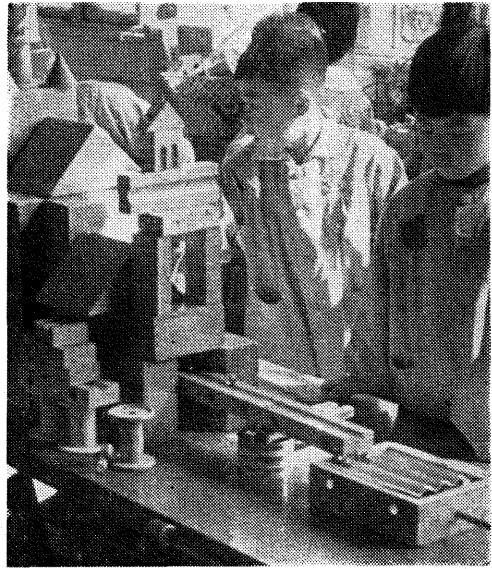
△失敗によってくやしさを味わい、くやしさが正しく感覚に浸みわたった時、今度こそとがんばる力が生れてくる。(例、いろいろの傾斜をころがしてみても「アアア、やっと渡ったよ」と言った)

△失敗のつらさがルールのきびしさを知らせる。失敗のつらさは、ずるさを育てるが、仲

間に指摘されることによりルールのきびしさを知り、正しくものを見る態度が育っていく。(例、机のへりから落さないようにころがす)

△繰り返し返しの経験が、仲間を助け励ます協力の方法を、理くつではなく体験として、身につけていく。(例、失敗しすぎる子を、みんな





が応援し励ます)

△繰り返し返しの経験で、意識しなくても考えるようになり、何度も考えて発展させていく、

△ほんの少しの変化も、子どもたちは見逃がさず自分たちのものにしていく。科学的に考えるようになる。(例、傾斜によって、ころがる速度が違う。指先ではじき方やころがし方で、方向が変わる)

△失敗したり、何度も繰り返ししている時は、ひとりひとりの性格がよく表われるので、指導の手がかりとなる。(例、すぐあきらめる子、できるまで頑張る子、チャンスを上手にとらえる子)

△失敗による繰り返しで、仕事を正確にすることを体験する。(例、きちんと正しくしないと、ころがらない。組木をきちんと合わせたり重ねたりしないと、思うようにころがらない)

以上述べてきたような子どもたちの姿を見て、くりかえすことにより、如何に効果があるか、がんばる力が進歩するかを目のあたりにみることができ、今まで町で、かけごととして遊ばれていたのと同じビー玉が、こんなに良い教材であること、こんなに小さなガラスの玉がこんなにも簡単に失敗させ、繰り返しさせ、そして発見させ、発展させ、成功させてくれるものである事を知り、おそろしさを感じた。

更に、子どもたちの遊びの基本型をも合わせ確かめることができた。基本型を挙げてみると、

ころがす

そつところがす

押してころがす

ねじってころがす(ひねる)

坂の上へ押し上げてからころがす

落してころがす

ぶつくる

そつとぶつくる

たたきつける(投げつける)

はじく

一本指ではじく

二本指ではじく

他の遊具教材ではじく

投げる

ほうり投げる

投げ込む

投げころがす

投げ当てる

つまむ

指先でつまむ

棒でつまむ

つまみはじく

つまみあげる

つまみ落とす

その場その場で、このような基本型を組み合わせさせて遊ばれ、驚くほどの繰り返しと発展がみられることがわかった。

終りに

今までの、おとなのビー玉に対する概念とは全く異なり、六月の糸巻、七月の空かんの遊びの中にもビー玉が取り入れられ、ますます発展していった。この間、三百個を補充したのだが、どの教材とも組み合せて遊べるように思われた。(写真⑤⑥⑦)

このように、私たちは身近にある教材を見落している事を感じ、強く反省させられた。そして、もっと、忘れられ埋もれている教材を見つけ出して、これ子どもたちに与え、確かめていくことが、私たちの教師のつとめではないかと、しみじみ感じたのである。

(足立区立関屋幼稚園)

日本保育学会第17回大会

日時 5月23日(土)～24日(日)

会場 日本女子大学

内容 (イ) 研究発表

(ロ) シンポジウム

(ハ) その他

参加資格 正会員 準会員(当日受付)

連絡先 東京都文京区高田豊川町

日本女子大学児童学科研究室内

日本保育学会第17回大会準備委員会

電話 (941) 三三三一 内線 17番